

研究会	第1回「アジア地域統合理論研究会」
司会	本多美樹（G-COE 助教）
報告者	上久保誠人、平川幸子、金ゼンマ（G-COE 助教）
日時	2009年10月28日（水）17時00分～19時00分
場所	早稲田大学19号館710教室
参加者	参加者：松岡俊二（アジア太平洋研究科教授）、浦田秀次郎（同研究科教授）、松本礼史（日本大学生物資源学部国際地域開発学科准教授、GIARI シニアフェロー）など十数名。

報告概要

第一報告では上久保誠人が「GIARI モデルの戦略的形成：課題と検討事項」のテーマで報告を行った。同報告は、GIARI のこれまでの歩みを振り返りながら、「アジア地域統合理論研究会」の必要性を考察するものである。

報告者は、GIARI の G-COE 拠点採択時や中間報告の提出書類、様々なシンポジウムやワークショップの報告書、議事録を読み返し、GIARI の研究・教育拠点としての特徴は、地域統合に関する多様な事例 を扱う研究者が豊富に揃っていることを示した。また GIARI における「アジア地域統合研究」は、16 人の事業推進担当者（拠点採択時）が事例研究を通じて、①相互理解、②研究分野、方法論の融合、③領域の再編、④新領域による共同研究のスタート、の順にボトムアップで発展してきたことも指摘した。そして、GIARI モデルが基本的には徹底した実証の積み重ねによって構築されるべきものとした。

その上で、報告者はボトムアップ・アプローチには、「アジア地域統合学」の考え方がバラバラな個々の研究者、領域の自然な相互理解、研究の融合で GIARI モデルが出来上がっていくのを待つだけでは時間が足りない。また、GIARI モデルがゴールとするものが不透明となり、研究を進める際に「全体性」「アジア性」の意識が抜け落ちやすいという2つの問題点があると指摘した。

そして報告者は、このボトムアップ・アプローチとその問題点、限界を克服し、「GIARI モデル」構築を進めていくことが「アジア地域統合理論研究会」の目的であると主張した。具体的には、「GIARI モデルの学術的点検作業」を行うとする。これは GIARI に属する全ての研究者、領域が共有すべきリサーチクエスチョンを明確化し、様々な個別研究、領域の共同研究を通じて、これらのクエスチョンを解き、その答えを集め、検証することである。それによって、個別の実証研究で抜け落ちやすい「全体性」「アジア性」を強く意識し、これまでのボトムアップにトップダウンのアプローチを加えることで、「GIARI モデル」構

築の流れを加速することを狙う（リサーチクエスションの明確化についての詳細は第二、第三報告）。

最後に、報告者は地域統合理論を研究する機関の調査を行い、その中間報告を行った。世界 23 機関との比較で明らかになったことは、GIARI ほど多様な事例を扱い、事例研究者を豊富に揃えている研究機関はないことである。それに加えて、研究の実態はともかく、インターネットでモデルを図示できるほど複合的モデルへの関心と成果を持ち合わせているのは GIARI だけであるとも言える。逆に、他機関は、統合理論研究に関する各研究者の成果の間をつなげようという動きが見えない。いかに GIARI の試みは、いかに過去に例がなく、志が高く、また困難で、ある意味無謀であるということがいえる。

今後は、GIARI の地域統合研究機関としての特徴をより明確にするために、①地域統合理論構築への成果、②実際の地域統合への貢献、③個別の研究者の活動と成果の 3 つの観点から、他機関と比較した GIARI の競争力を検証する。

（上久保誠人）

第二報告では平川幸子が「現代アジア学の創生（COE-CAS）が残した研究課題」のテーマで、報告を行った。同報告は、21 世紀 COE の研究成果である『東アジア共同体の構築 1~4』（毛里和子編集代表、岩波書店 2007 年）をレビューし、新たに GIARI の研究課題として意味のあるポイントを探ろうとするものである。

同書はシリーズ全体として、「アジアは作られる」という立場を明確に打ち出した上で、地域形成の実態、蓋然性、制度設計を検証することを包括的な問いとして提示していたが、第 4 巻を除いて必ずしも実証的かつ複合領域的な結論は示されていない。報告者は、全巻において理論的、学際的にアジア統合を扱った論文をレビューし、GIARI として考慮すべき研究上の方法として、以下の点を指摘した。

まず、①唯一、結論として示されている「東アジア地域では、政治・軍事以外の領域で複合ネットワーク構造が見られ、成熟した非階層的な「分散型」に移行しつつある。が、域外への広がり同時並行し、中心が移動するなど、境域は定まらない。社会・文化領域で経済統合の動きを受けて、「地域化」現象が見られる」という見解を GIARI の共通認識としてその先に進むこと、②GIARI が上げている 3 つのキー・コンセプトのうち、ネットワーク、アイデンティティに比べてサステナビリティの研究が手薄である、③ 3 × 3 のキーワードの位置づけを再考すれば伝統的地域統合理論にある程度合致ができる、④グローバル化とアジア地域統合の連動性も分析対象になりうる。

以上を前提として報告最後では、今後 GIARI モデルの理論化につながりそうな複数のリサーチ・クエスションを提示したが、その中で特に重点的に説明されたのは、「なぜ、アジアでは政治・非政治領域が顕著に分離・独立する傾向が見られるのか？（日中関係固有の「政経分離」「政冷経熱」のキーワードはアジア地域統合にも適応するのか？）」「このよう

な傾向を示すアジアでは、政府・非政府（民間）アクターに補完関係があるのか？」「政治統合に向かわないアジアで、何がサステナビリティを担保するのか？」などの問いである。

これらの問いについて会場からは、①先行研究の問題点や不備を GIARI モデルから説明できるか検証が必要である、②経済領域からいえばリサーチ・クエッションは抽象的ではなく実証的なものにしてほしい、③あえて統合と身構えなくともアジア全体に見られる「アジア性」はある、④未成熟な国家が多いアジアで、地域機能が進展する場合に、ネットワークやアイデンティティが「国家」に代わる役割を果たすのかについて調査できる、などのコメントがあった。

報告者が今回提示したリサーチ・クエッションは初期的なものであったが、複合的・学際的視点からの問いを目指す初の全体的試みであった。第二回研究会に向けては、①リサーチ・クエッションを、GIARI 各研究領域の特性や強みを有機的に結びつけた具体的で確度の高い内容に修正すること、②3つのキー・コンセプトをなるべく生かしつつも、将来的に統合理論の主流となれる使いやすい方法論を確立すること、の2点を課題とする。

（平川幸子）

第三報告では金ゼンマが「アジア地域統合研究の最近の動向：新しいパラダイムを求めて」のテーマで、報告を行った。同報告は、国際関係理論のアプローチから、従来のアジア地域統合研究における(i)概念の精緻化、(ii)統合理論アプローチのアジアへの適用可能性、(iii)東アジア地域主義をめぐる従来の先行研究の再検討、(iv)事例研究としての ASEAN+3、の四点から最近の動向を網羅した上で、GIARI モデルの位置づけを模索するものであった。

まず、報告者はアジア金融危機に依拠する「第三の波」及びアジアにおける De facto としての経済統合を挙げ、経済統合の制度化による形成プロセスの一環としての FTA を指摘した。(i)概念の精緻化については「アジア」「地域アイデンティティ」「地域化」「地域主義」等を挙げ、(ii)統合理論アプローチのアジアへの適用可能性については、特に政治的統合理論を挙げ、新機能主義(Hass)、社会統合論(Deutsch、多元的安全保障共同体)から成る融合モデル(Wessels)の GIARI モデルへの応用可能性を模索した。(iii)従来の東アジア地域主義の制度化をめぐる議論に関しては、国際システム要因、文化的要因、国内政治要因の三つのアプローチから分析し、それぞれの先行研究の改善点を挙げた。(iv)ASEAN+3 をめぐる議論に関しては、東アジア協力に対する「懐疑論」—どこまで実態を伴った発展を示すかは未知数であると指摘(渡辺、吉野、菊池、等)—に焦点を当て、分析した。

これらの先行研究を網羅したうえで、報告者は下記のリサーチクエスチョンズを挙げた。①Ballasa、Hass 流の単線的発展モデルによる地域統合のアジアにおける解釈、応用可能性。そのための「条件」、「応用可能性」、「意義」を議論すべきではないか。②アジアにおける「制度化」の程度、範囲の問題。アジア地域統合の想定する制度化のレベルをどのように定義するか。③GIARI モデル「アジア地域統合学」(3×3 のマトリックス) のアジア

地域統合理論研究における位置づけ。そもそも「アジア地域統合理論研究」の議論すべき「争点」は何か。それらの争点を3×3にどのように位置付け、融合させるべきか。④懐疑論の解釈問題。歴史の視点から東アジア協力がどこまで実態を伴った発展を示すかは依然未知数であると指摘する「懐疑論」をどう解釈し、「東アジア共同体」をめぐる議論の発展へどう繋げるか、の4点を挙げ、理論と実態の総合体系化の議論必要性を提示した。

以上の問題意識についてフロアからは、①これらの先行研究をGIARIモデルから見てどのように位置づけられるのか、②EUとの比較を通じて、地域統合理論の枠組みをどこまでアジア統合に適用できるのか、3×3にどのように対応しているのか、③「統合」をどのように計量的に捉えるのか、④機能的枠組みの形成と国家との関係性の問題。単線的発展モデルだけでは不十分であり、FTAに代表される機能的枠組みの進展がウェストファリア体制から設定することができない国家の未成熟と同時並行的に行われているアジアの現象をどう考えるのか、⑤GIARIモデルは3×3×3(経済、政治、社会；サステイナビリティ、ネットワーク、アイデンティティ)であることを念頭におき、政治と経済の接点としてサステイナビリティに焦点を当てるべきである、⑥「地域化」と「地域主義」の明確な概念の違い、関係性を意識すべきであり、そのような意味でも「アジア地域統合定義集」を打ち出す必要性がある、などのコメントが挙げられた。

(金ゼンマ)